報告

西南戦争の戦跡を歩いた「歴史ロマン探検隊」

林　寛
（会員　津志河内）

見応えのあったＮＨＫ大河ドラマ「西郷どん」の放送が終わった。その多くに感動を覚え、幕末から明治にかけての激動の時代を生き抜いてきた人たちや困窮する農民たちの姿に心を動かされた。

明治一〇年（一八七七）二月十九日に勃発した西南戦争。大分県での戦いは、宮崎県（当時日向地域は鹿児島県の一部であった。）との県境の山岳地帯を主戦場として激しい争奪戦が展開された。

大分県の本格的な戦闘が始まったのは、五月に入ってからで、十二日薩軍が重岡に侵入し、次第に攻防戦が激しくなった。臼杵では士族八〇〇人による臼杵隊が編制され、官軍とともに戦うが、佐伯では士族四〇人による新奇隊が編制され薩軍に従うが、官軍の海上からの艦砲射撃などが加わり、薩軍は次第に追われ県境の山地を舞台に、激しい戦闘が繰り返されていった。激戦地であった県境の山地を、一昨年から「歴史ロマン探検隊」で探検しその戦跡を歩く。見て触れ感じたことの幾つかを紹介する。

「歴史ロマン探検隊」が探検した西南戦争の激戦地、この中から「高床山」「陸地峠」「梓峠」「三国峠」を紹介する。

①平成二十九年三月二十九日（水）
蒲江地区高床山

②平成二十九年十一月二十九日（水）
直川地区「陸地峠」

③平成二十九年十二月十三日（水）
宇目地区「梓峠・黒土峠」

④平成三十年一月二十五日（木）
青山地区「石神峠」

⑤平成三十年一月二十九日（月）
延岡市北浦町「陣ケ峰」

⑥平成三十年三月二十二日（木）
宇目・本匠地区「三国峠」

⑦平成三十年四月二十一日（土）

日帰り研修会「熊本城・田原坂」

⑧平成三十年五月二十四日（木）

延岡市「和田越・俵野」

難攻不落の堅塁「三国峠」に、

日向飫肥藩士　十一名が眠る。

三国峠は本匠、宇目と豊後大野市三重町の境にある標高６６４ｍの峠で、江戸時代の頃、臼杵藩・岡藩・佐伯藩の三藩の境界にあることから三国峠と呼ばれるようになったと伝えられ、遥か昔から、豊後と日向の国を結ぶ交通の要所であった。

平成三十年三月二十二日（木）、三国峠の探検に十四名が参加した。三国峠には幾つかのルートがあるが、山道が陥没し通行が困難なため、国道３２６号から宇目・本匠に通じる樫峰から三国峠を目指すことになり、樫峰の入り口で案内して頂く佐伯史談会会員、戸高厚司さんと合流した。

山間の静かな樫峰は、番匠川源流の地とされ、その脇を抜け山頂までは舗装された街道（今は市道）があった。その昔、この街道は日向と豊後を結ぶ重要な街道で、つづら折りになって狭く、変化に富んでいる。斜面からの落石に注意しながら辿ると、街道沿いの杉林の斜面に、和紙の原料となる「ミツマタ」の群生地があった。本匠地域は山地が多く、農業に適さない地形を利用して、江戸時代佐伯藩主が山の斜面に栽培を奨励したのが「ミツマタ」であった。淡い黄色の花とほのかな甘い香り、この不思議な光景を満喫しながら街道をさらに辿ると、西南戦争で戦死した人たちを慰霊したとされる、財部海軍大将が揮毫した石碑があった。この豊後街道の傍らには、二体の歌碑が建っていたが、どこか寂しい雰囲気が漂っていた。

石碑は西南戦争の戦死者の魂を鎮めるために、朝地町出身の歌人、田吹繁子の「兵あまた命すてたるこの丘は、いまも秋草の花も埋もる」と、放浪の詩人、種田山頭火の「日が落ちかかる　その山は祖母山」の歌が詠まれていた。

朝地町の歌人　田吹繁子の
歌碑が街道の傍らに立つ

難攻不落だった三国峠の激戦の様子を
説明する戸高厚司会員（左から四人目）

急坂を登り上がると三国峠の山頂に着いた。山頂は解放感溢れる草原で見通しが良く、真向かいには激戦地であった旗返峠（511m）が見えた。

明治十年六月十二日　薩軍は三国峠、旗返峠に布陣し官軍の侵攻を食い止める策をとった。三国峠、旗返峠などの大連峰などは、官軍にとって難攻不落の堅塁で、薩軍の勇猛果敢な抜刀隊などの反撃に苦戦を強いられ、三国峠や旗返峠はなかなか陥落しなかった。十七日官軍の激しい反撃が始まった。間断なく攻撃が続く、この頃の薩軍の弾薬は乏しく、本営からの補給もあてにならない。連日の戦いにより兵士は疲れ寝入ってしまった。官軍は膠着状態を打破するために決死隊を編成した。決死隊には河野辺軍曹以下十六名の銃創に優れた有志が選抜され、軽装で間道を伝わって山腹を一歩一歩よじ登った。薩軍に発見されることなく山頂に着き敵陣に接近、午前二時　薩軍兵士が熟睡しているところを壕に飛び込み、日向飫肥藩士、山田宗賢以下十一名を刺殺した。決死隊には死者はなかった。

山頂の三国神社には二つの墓碑があった。一つは萱が生い茂った中に苔むした飫肥藩士の墓碑であり、「日向

飫肥士族十一名之墓、明治十年六月十七日、三国峠ニテ死ス」と記された供養塔もあった。

三国神社に眠る日向飫肥藩士の墓碑

供養塔は旧日向飫肥藩士の遺族や地域の人たちの献身的な努力により建立したもので、今も地域の人たちが手厚く祀っているという。隊長であった山田宗賢の墓碑は、少し離れた本匠地区寄りの萱で覆われた木の傍らに、ひとり寂しく眠っていた。戦いに散った兵士たちを偲びながらの三国峠の探検でした。

日向飫肥藩士　隊長　山田宗賢の墓碑

「梓峠」「黒土峠」は古くから拓けた街道
「逆茂木」や「台場」の壮絶な山岳戦

キリシタン大名　大友宗麟（義鎮）は、日向国無鹿（延岡市）にキリシタンの理想の国建設にもえ、梓越えをした。薩摩島津軍が天正十四年（一五八六）、豊後に侵入した豊薩戦争の際、島津の大軍を引き連れ、日向から梓越えをしたと伝えられ、古代から梓越えは水ケ谷から八戸、熊田（北川町）に至る。豊後から日向を結ぶ交通の要所で、梓越えが最良の街道であったようだ。

宇目地域は、峻険な山々に囲まれ、特に梓山周辺は広大な山林に囲まれた地域で、豊富な森林資源を巡って江戸時代の頃、岡藩と延岡藩の国境相論が絶えず発生した所である。話し合いをするが一向に解決せず、争論は江戸幕府評定所で度々取り上げられ吟味されたと伝えられている。

平成二十九年十二月十三日（水）、梓峠の探検に十名が参加した。案内は陸地峠に続き、史談会員、小野幾夫さんにお願いした。早朝から北風が吹く寒い中、重岡地区の敷倉から水ケ谷方面を目指した。水ケ谷への交通アクセスは、山間コース（今は市道）で、道路は舗装されているが狭く、険しく所々注意喚起の案内板が設置されていた。険しい街道を抜けると視界が開けた。景観を楽しみたいと街道沿いの広場で休憩をとることにした。傾山や雪化粧した由布岳などの山々を眺望する事が出来、寒いが素晴らしい眺望を満喫する事ができた。

街道を少し走ると、傍らには黒土峠の古戦場跡の標柱があった。黒土峠はなだらか山容で北川、八戸からきた侵入者は、必ずこの黒土峠の広い尾根を通らなければならず、それだけ、この峠は戦略的にも重要な地であった。今はこの峠は一面萱や雑木に覆われ、当時の戦いの様子を伺う事ができないが、街道から台場らしき物がないかと探すが、その痕跡を確認することができなかった。高橋信武氏の「西南戦争の考古学研究」によれば　百十六基の台場が確認できたとある。

黒土峠を抜けると街道は、緩やかな下りになって、平坦な道沿いに「官道」（奈良時代の頃、律令制度が敷かれ、豊後と日向の国府を結ぶ官道が通っていた。）と書かれた標柱を発見した。

黒土峠の戦場あとを示す標柱の前で

この街道は、古くから栄え交通の要所だったことが伺われる。「官道」の標柱を下って行くと水ケ谷に通じる。水ケ谷は西南戦争の頃は官軍の食糧庫などが置かれていたが、今は四方を山に囲まれた静かな集落であった。梓山に通じる「官道」に沿って辿ることにした。「官道」を辿るにつれ道は次第に険しくなった。鬱蒼とし曲がりくねった杉林を抜けると展望が開け、景色を背にしてひたすら登ると、岩がむき出した急斜面が現れ、その斜面を岩や立木の枝に捉まり、足を踏み外さないようにして登る。

険しい梓峠を目指す会員たち

一段一段したたかな登りで息もあがる。登っていくと梓峠に到着した。

当時の梓越えは大変な難路で、薩軍は農民兵を組織し、万里の長城のように逆茂木（敵の侵入を防ぐため木の先端を鋭くとがらせた柵）を巡らせ、官軍の侵入を阻んだと伝えられている。台場跡があっただろうと思いながら、辺りを見渡すが雑木が生茂り、落ち葉などに覆われ当時の痕跡を発見する事ができなかった。梓山（標高７２５ｍ）の山頂は、もう少し登ったところであるが、険しいので登頂を断念した。

明治十年六月二十七日の明け方、薩軍は梓峠を襲撃する作戦を決行した。北川熊田から八戸村を出発し、険しい小道をよじ登る。鬱蒼とした大木が繁り、岩場を乗り越え、谷を渡り山頂に着いた。山頂に兵を留め潜伏した。

七月三日午前三時、梓峠の官軍台場に薩軍が、朝霧に乗じて斬りこんだ。さらに梓峠下の水ケ谷の食糧庫を襲った。水ケ谷は四方を山に囲まれた静かな山里で、江戸時代には岡藩の番所や茶屋などがあった。

七月二十日、水ケ谷、梓峠国境線の官軍の夜襲が多くなった。しかし、薩軍はこの動きを察知し、激しく攻撃を加え、官軍は銃器などを棄て散乱していった。

県境の山岳戦では、多くの村人たちが動員されていった。山岳地帯での台場や逆茂木などの工事は、夜間に行われたという。昼間は襲撃される恐れがあり、夜間であっても明りをつければ狙われる。真っ暗闇で作業が行われた。さらに物資の調達や運搬などにも多くの人夫が係り、その人数は図り知れないほどであったと伝えられている。また、地理を知らない山地での移動、それも夜間に移動となると簡単ではなかった。道に迷う事がしばしばあったはず、見通しの悪い山道や尾根などを移動するのに大変な困難がともない、そこで村人たちを強制的に道案内として動員していったのである。寒さを感じさせない有意義な梓峠と黒土峠の探検でした。

新選組隊士　斎藤一が参戦した「高床山」

新選組元隊士であった斎藤一が参戦したのが蒲江葛原の「高床山」（標高３８７ｍ）である。

斎藤一は新選組最強の手練とも言われ、何故か度々名前を変えた謎の多い人物であった。なぜ度々名前をかえ

る必要があったのか。新選組の元隊士たちは、多くの事件に関わり深く恨みをかっていた。そのために名前を変え、追及を遁れるために改名し、別人になったのではないか。

官軍の出張参謀本部が置かれていた青山黒沢の東光庵
明治の文豪　国木田独歩が境内の塩釜桜見物に来たという名所

新選組離脱後は会津藩士とともに行動し、会津藩改易後は本州の最北端にある斗南（となみ）（青森県下北半島）の地に移住し極寒の地斗南で大変な生活をした。厳しい寒さのなか食料も乏しいため、餓死者が出るほどの塗炭の苦しみを味わった。

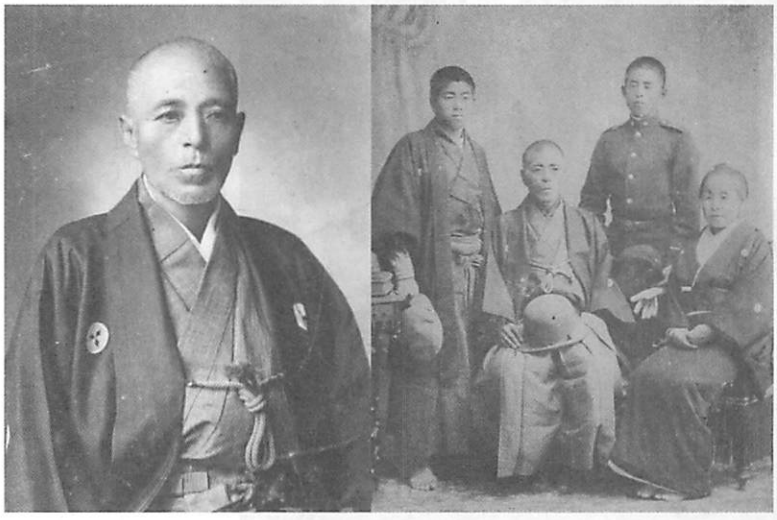
斎藤一は明治に入り警察官となり、西南戦争には警視隊の二番小隊の半隊長、藤田五郎として参戦した。

明治十年五月十八日、横浜港を出港し、佐賀関から青山黒沢村の官軍出張参謀本部（東光庵に官軍の本部が置かれていた。）に立ち寄り山岳戦に参戦した。藤田三十四才であった。藤田は最大の激戦地「田原坂」には参戦していないが、日向の三川内（北浦）の戦いでは、部下を督励して斬り込み、薩軍の大砲を二門奪うなどの大手柄をたてた。

半隊長　藤田五郎の警視隊二番小隊は、七月十二日午前二時蒲江森崎村を出発し、丸市尾村で鎮台兵と合流し兵を二分した。藤田の隊は本道を、分隊長の隊は間道を進んだ。藤田の隊は福原峠を越え、焼尾峠から高床山を責めるが、薩軍に阻まれ藤田は銃創を負った。この戦闘で鎮台兵八名が負傷し、警察官は藤田を含む二名が負傷

した。

この高床山の戦いの様子が、後日「東京日日新聞」に大きく報道され、負傷した藤田は佐伯城下、船頭町の大日寺佐伯大包帯所（野戦病院）に急送され手当された。この当時、野戦病院のことを「包帯所」と言った。



斎藤一（藤田五郎）と家族の写真

斎藤一の写真は見つかっていなかったが、平成28年（2016）、会津若松市の県立博物館で公開された。　斎藤一　当時53歳

戦場に隣接したものを「小包帯所」、重傷者を後送する野戦病院を「大包帯所」といい、当時の寺院は臨時の野戦病院になっていた。前線に近い小包帯所には、多くの怪我人が運び込まれた。応急処置をして後方の大包帯所に送るが、一人を送り出すとまた一人が運び込まれてくるといった状態であった。

治療といっても、銃弾を抜き止血し、刀創を縫合するぐらいの応急処置しか出来なかったと伝えられている。その後、藤田は東京教育博物館看守などを勤め、大正四年七十二才で没した。

平成二十九年三月二十九日（木）、高床山の探検に八名が参加した。高床山への交通アクセスは、蒲江の海岸沿いを走る国道３８８号線を丸市尾から山間に入り、宮崎県北浦町へと向かう。県境と接する山々は場照山（６６１ｍ）や津島畑山（５０６ｍ）などの高く険しい山々が続いていた。山々は豊かな常緑広葉樹林に覆われて、深い山々は至る所で渓谷を形成し、緩やかな山腹には杉や檜が植えられていた。県境の福原峠に車を停めた。峠の道端には「お地蔵さん」が祀られていたので、行路の安全祈願し高床山を目指した。尾根道は緩やかな斜面

や胸を突くような急斜面があり息があがる。木の根や大きな岩に遮られ、木の枝につかまりながら登る。足場の悪いところが随所にあり、尾根道は樹木に囲まれ展望は今ひとつであった。

険しい高床山を目指して登る会員たち

さらに登ると高床山の三角点に到着した。山頂は意外と狭く険しい断崖が続いて、山頂付近には激しい戦いの跡も残ってなく、何かしら余韻が残る探検であり、山頂の木の間越えに激しい戦闘が繰り返された県境の山々を望む事ができた。

直川の全域で戦闘が展開され「陸地峠」は激しい風雨の中の奇襲攻撃

直川の全域での激しい戦闘が、五月上旬から七月中旬までの二か月間続いた。戦場となった直川の村々では、多くの家々が薩軍と官軍の宿舎となり、村人たちは炊き出しや食糧の徴発、物資の運搬などを強いられた。以前、赤木地区に住むお年寄りから聞いたことであるが、田圃や畑で農作業をしていると、無数の鉛の弾丸を発見したという。発見した多くの弾丸を見せてもらったことがある。この事からもこの地域が無数の弾丸の飛び交う壮絶な戦場であった事がわかる。

明治十年六月から七月にかけては長雨が続いた。横川村、仁田原村、赤木村へと戦闘が展開していった。

両軍ともに苦戦するが、官軍は薩軍を追って攻撃を続ける。弾薬が欠乏し敗色が濃厚になった薩軍は、仁田原村から陸地峠へと退却を始める。当時の陸地峠は北浦（歌糸・古江）、北川から佐伯を結ぶ重要な物資の補給路であった。

県境に建つ
「西南の役戦跡碑」の標柱

平成二十九年十一月二十九日（水）「陸地峠」の探検に十一名が参加し、案内をして頂く佐伯史談会会員、小野幾夫さんと赤木で合流した。陸地峠は県道赤木吹原佐伯線から、赤木ダムの脇の舗装された林道を通り、奥深い谷を抜けると、宮崎県との県境の陸地峠に到着した。

陸地峠の山頂で激戦の様子を説明する小野幾夫会員

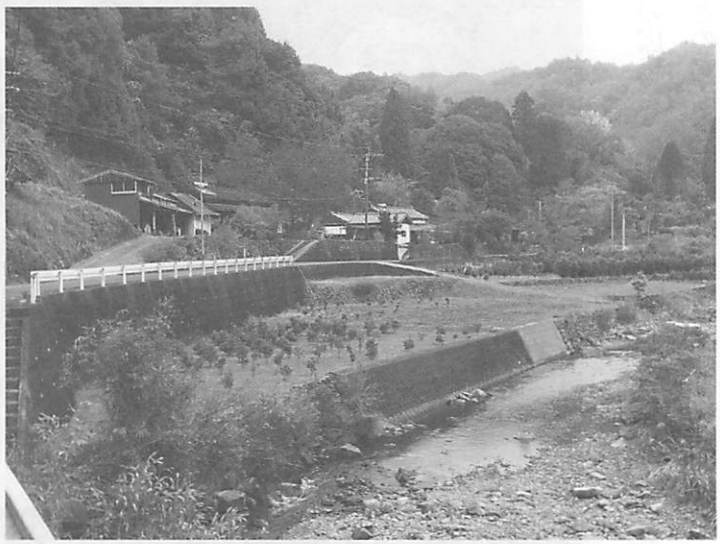
県境の広場には、西南の役戦跡碑、兵士や馬の水飲み場跡などの案内板や標柱があった。

明治の頃の陸地峠は、急な山肌と深く切り込んだ谷、起伏の大きい稜線が延々と続き、急な坂道には雑木が生茂っていたと伝えられているが、今は萱と雑木が生茂り、当時の様子を伺う事は出来なかった。

県境広場から緩やかな尾根道を登っていくと沿道に「延命地蔵尊」が祀られていた。尾根道からは、激戦地となった場照山や北浦などの山々を一望する事が出来た。山頂には直川史談会が昭和六十年に建立した「西南戦争の石塔」が建っていたが、山頂周辺は雑木や萱、落ち葉などで覆われていた。台場跡らしきものがないかと辺りを探すと、長い陥没したものを幾つか見つける事ができた。高橋信武氏の「西南戦争の考古学研究」によれば、陸地峠周辺には約百三十基の臺場跡が存在したとある。

陸地峠の県境広場から、北川町陸地地区を迂回して下ることにした。陸地集落への林道は、つづら折れした急な坂道で荒れ、石がゴロゴロと林道を塞ぎ、なかなかの難路であった。陸地の集落は民家が疎らで閑散としていた。

明治の頃の陸地峠は、山地が広く森林資源に恵まれていたため、炭焼きが盛んであった。そんななか、村人たちは食糧の調達に追われて作ったのが「あくまき」であった。（「あくまき」はもち米を灰汁（あくしる）につけ、竹の皮で包み煮込んだもので「ちまき」の事。今では、鹿児島県や宮崎県などて、端午の節句に好んで食べられる。）



当時戦場だった陸地峠（北川）は、
今は静かな集落となっていた。

「あくまき」は、昔から薩軍兵児（へこ）の兵糧として携行したと伝えられ、村人たちは長雨により、泥でぬかるんだ山道を登らなければならなかったのは、大変苛酷な労働だったに違いない。

官軍兵士には、沢山の食べ物があったようだが、薩軍兵士は食糧が不足し、空腹で動けなくなった兵士がいたようで、村人からの差し入れに大変喜んだと伝えられている。

明治十年六月末から七月にかけて暑い中、激しい雨の中、抜きつ抜かれつの激しい山岳戦が続いた。七月十二日、長い事守り続けた陸地峠の補給路が官軍に奪還される。薩軍は北浦、北川からの補給路が必要であった。この為、石上峠（青山）、明石峠、津島畑山（蒲江）、三川内（北浦）などに兵を置き、人夫、物資を補給し防備をかため、かがり火などで威嚇していた。

七月十五日より降り出した雨はますます激しくなった。陸地峠の戦況が大きく動いたのは、七月十六日夜半、午前二時、官軍の決死隊が奇襲攻撃に出た。陸地峠の正面と迂回する作戦に、薩軍は悪天候にうっかり油断したのか、連日の戦闘の疲れが出たのか、一人の哨兵も立てずに眠り込んでいた。決死隊は、壕の中の薩軍に向って「起きろ」と大声でどなると同時に壕に飛び込み刺殺した。

直川史談会が建立した西南戦争の石塔の前で

一瞬の出来事で薩軍は何の抵抗もなく全滅した。薩軍の死傷者は十七名、敗れた薩軍は武器を捨て、北川、延岡へと敗走し、この台場が敗れた事により薩軍の敗色は濃厚になっていった。

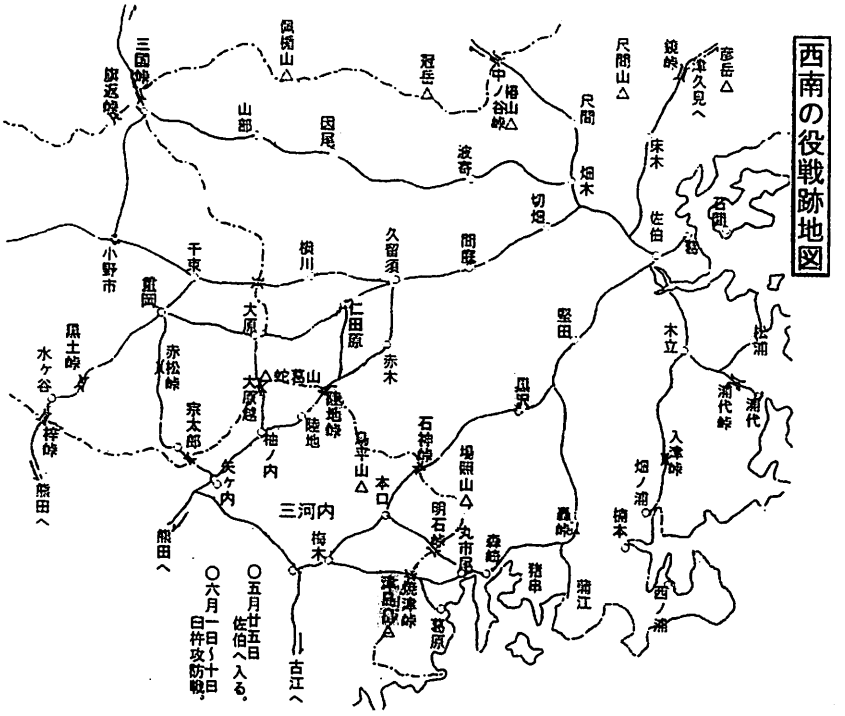
県境の陸地峠、梓峠、黒土峠、津島畠山などの戦いで、戦死した官軍の兵士と、警察官の墓碑が岡の谷、佐伯招魂所に祀られている。長い間、風雨にさらされ浸食が進み、幾つかの墓は傾き文字は判然としない。

薩軍の兵士たちは、墓もなく異郷の地で寂しく屍をさらしたままであるが、直川には戦いに散っていった兵士たちの墓碑が幾つか残っている。

仁田原（にたはら）正定禅寺には、官軍兵士の墓碑が、赤木吹原には薩軍兵士の墓碑が残って、今も地域の人たちが手厚く祀っているという。

貴重な体験をした探検でした。

西南戦争で戦場となった地域では、大きな被害を受けた。牛・馬・鶏などが徴発され、住民たちは家や田畑を荒らされたり、徴用され雑役として、山中の道案内や炊き出しを行い、食糧や武器などの物資の運搬に駆り出され、住民たちは大きな犠牲を強いられ必死にもがき苦しんだ。



西南の役戦跡地図

百四十年経過した今も、各地には西南戦争に係る幾つかの逸話などが語り伝えられており、七ケ月に及んだ西南戦争も明治十年九月二十四日に終戦した。

「歴史ロマン探検隊」には、多くの女性会員も参加され、参加されたみなさんからは、「大河ドラマに合わせた探検で、西郷どんの見方も代わり、大河ドラマをより面白く楽しく見る事ができた。」「普段体験することのできない貴重な体験をする事ができ、魅力を再発見することができた。」と大変好評であった。

参加した皆様、大変お疲れさまでした。

《参考資料》

佐伯市史　蒲江町史　直川村誌
直川村郷土史　宇目町史　三重町史
西南戦争豊後方面戦記
延岡市史　北浦村史　北浦町史
北川村史　北川町史
西南戦争（小川原正道著）
西南戦争の戦跡を訪ねて（延岡市教育委員会）
西南戦争の考古学的研究（高橋信武著）
西南戦争血涙史（北村清士著）

直川陸地峠の台場跡で共に探検する雉？山鳥？